

# 帝都を北に

(明治四十三年寮歌)

谷村愛之助君 作歌

柳沢秀雄君 作曲

一

帝都ていとを北きたに三百里さんびゃくり  
津輕つがるの海うみを越え来れば  
紅塵こうじん絶えて空潔そらぎよく  
蕭々せうせうとして水寒みずさむし  
大陸たいりくの精鍾せいあつまりて  
我北州わがほくしゅうの島しまと凝こる

二

鯨群げいぐん吼ほゆる荒潮あらしほに  
落おつる北斗ほくとの影かげ冴さえて  
斧鉞ふえつ入いらざるや森林しんりんや  
人跡じんせき絶たえし大野原おおののほら  
原始げんしの儘ままの倅おもかけを  
我北州わがほくしゅうの島しまに見みる

三

鈴蘭すずらん薫かほる春はるの野辺のべ  
榆しもかげくさしげの下しも蔭かげ草くさ繁しげる  
霜葉そうよう燃もゆる鳶つた葛かつら  
吹雪ふぶきは叫さけぶ冬ふゆの夜半よは  
四季しきの変遷へんせん興きよう添そえて  
眺めは飽あかぬ姿すがたかな

四

朝霧あさぎり深ふかき野のの面おもに  
嘶いなく駒こまの跡あと追おへば  
露つゆの白玉しらたま散みだり乱みだる  
甘藍かんらんの畑はたけたそがれて  
プラウの土つちを払はらふ時とき  
農牧のうぼくの幸謳さうたふかな

五

見みよ文明ぶんめいは北進ほくしんす  
古このううは盛にひびきららず新酒しんしゅを  
新文明しんぶんめいの建設けんせつは  
濁にごれる都みやこにあらあらずして  
渺びようたる大河たいがの片辺かたほとり  
地ちは広漠こうはくの冲積層ちゅうせきそう

六

此聖都このせいとを永とこ久へに  
浮華ふか輕佻けいてうの国くにとせず  
真摯しんし素樸そぼくの郷きやうとなし  
我等われらが使命しめい成なし遂とげん  
真理しんりの秘奥ひおく探さぐる可べく  
道義どうぎの光ひかり照てす可べく